

保育士・幼稚園教諭養成校では 文章表現系の科目で何を教えているのか

西川友理

はじめに

筆者はこれまで、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、保育士など、福祉系対人援助職全般の養成に携わってきた。その中で、実習指導に関わる書類の作成時の指導や、卒業研究の指導、日々の提出課題の添削など、日常的に文章表現のありかたを指導することはもちろん、時には文章表現に関わる授業を担当することもあった。

そのような日々の中で、すべての学生がそうだというわけではないが、全体的に国語力、特に文章表現に拙さを感じることは多い。しかし、福祉系対人援助職の養成課程には、ほとんど全ての資格で実習が課せられている。この時、実習日誌を書かなければならない。ということは、実習日誌が書ける程度の文章表現能力をつけることなく、実習に出すわけにはいかない。もちろん実習のためだけではなく、当該養成校を卒業した直後から、職業人として社会に出るケースが多い事を考えると、養成校にいる間に、最低限の文章表現能力を身に付けておく必要がある。つまり、文章表現に関する授業は、対人援助職の養成校において、今や欠かせないカリキュラムの一つとなっていると考えられるのである。

本研究は、福祉系対人援助職の中でも、特に保育士と幼稚園教諭の養成校における文章表現系の科目について、シラバスを収集し、その内容を分析することにより、保育者養成の現場でどのような文章表現指導が行われているのかを明らかにし、そのより良いあり方を考察するものである。

なお、本論文において「文章表現系の科目」とは、「社会人として、ある

いは保育士や幼稚園教諭として、日常的に書く・読む・聞く・話すといった手段で表現する方法について学ぶ科目」を指すこととする。

I. 研究の背景

1、保育士・幼稚園教諭養成課程における文章表現系の科目の位置づけ

保育士については、『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』¹⁾を参照したが、文章表現系の科目は設定されていない。

一方、幼稚園教諭については、『教職課程認定基準等』²⁾によると、「[教科に関する科目]」に開設する授業科目は、国語、算数、生活、音楽、図画工作、体育及びこれら科目に含まれる内容を合わせた内容に係る科目その他これら科目に準ずる内容の科目（以下「幼稚園全教科」という。）のうち、一種免許状の課程認定を受ける場合は5教科以上、二種免許状の課程認定を受ける場合は4教科以上の科目ごとに授業科目が開設されなければならない。」となっている。文章表現系の科目は、このうち「国語」あるいは「生活」の科目に準ずる内容の科目として設置されていることもある。

現在、わが国で学生募集を行っている保育士養成課程がある短期大学は、全て幼稚園教諭免許の養成課程を持っている。よって、これらの短期大学では、何らかの形で国語や文章表現に関わる科目が実施されている可能性はある。

一方で、文章表現系の科目を一般教養科目として設定している大学や、実習指導教育の一環として設定している大学、キャリア教育の一つとして設定している大学もある。

以上のように、養成課程におけるシステム上の位置づけは一様ではない。

2、学生の文章表現能力の低下

日々の文章指導をしていると、学生達に対して、本来は義務教育で養われて来るべき文章力が不十分な状態で入学してきていると感じることが多い。

助詞の使い方間違い、ボキャブラリーの少なさ、口語表現と文語表現の混乱、主語と述語の整合性のなさなど、基本的な文章表現に問題を感じる。

これについては、保育や幼児教育の現場の管理職の方々からも「最近の若い職員は文章力がない」「日本語表現が不得意な人が増えている」と言う事がある。近年では、いくつかの業者が現役保育士のための「文章力アップ研修」や「文章術」などの講座を開講し、これらが商売として成り立っているという状態である。

学生からは時々「中学、高校ではここまで文章表現について、指導されてこなかった」という発言を聞く。保育系学生の文章能力の低下について、佐藤³⁾ や田中⁴⁾ は、それぞれ学生へのアンケートや自身の経験に基づき、大学に入学するまでの教育場面における文書指導が不十分だったのではないか、という指摘をしている。

2016年9月に発表された日本漢字能力検定協会による小中高校と専門学校の国語科教員を対象にしたアンケートの結果⁵⁾ が興味深い。これによると、文章指導の重要性について「大変高まっている」との回答が47.6%、「やや高まっている」との回答が39.9%となっており、9割近くの回答者は文章指導が重要と考えていることがわかる。一方で、文章指導の状況については、「ほとんどできていない」が6.7%、「あまりできていない」が59.0%で、6割以上の教員が指導出来ていないと答えている。「十分できている」との回答はわずか0.6%であった。同アンケートでは、困っている事として「文章作成に苦手意識を持つ学生が多い」62.5%「文章指導の時間がとれない」51.4%、また「指導の効果測定の方法がわからない」「文章指導の方法がわからない」などもそれぞれ3割超の回答があった。

実際に小中高校において、文章指導の必要性は高まっているが、これに対応する指導が十分でないという現状が見える。このような背景を持った学生たちが、保育士・幼稚園教諭養成校にも入学するのである。

3、大学や社会で求められる文章表現能力

高松は「そもそも小中高の国語教育では大学や社会で必要とされる文章表現能力は向上しない」⁶⁾と指摘している。

大学では論文などで、自分なりの考えを提示することが求められることが多い。しかし、現在の我が国の教育は「正解」を導き出すことを主眼としている。近年、総合的な学習の時間や生きる力の教育など、思考力を鍛える教育を試行錯誤されてきたものの、高校受験や大学受験が依然幅をきかせているわが国の社会において、点数化しやすい「正解」が導き出せる学習こそが勉強であるという考え方は根強い。だとするならば、普通の小中高校では、自分なりの考えを論ずるような能力の指導は後回しにならざるを得ない。

例えば幼稚園教諭の業務内で必要とされる文書作成の機会を考えると、園だよりや連絡帳、保護者への手紙、会議の議事録、業務日誌、指導案、外部連携機関への手紙やメール、研修報告書、日常的な伝言メモ、実習日誌の返事などがある。これらの作成について、小中高校で教えられることはまずないが、専門職としてはもちろん、社会人として必要な技術であると考えられる。

以上の事から、大学生らしい文章表現や、社会人・専門職として必要な文章表現を身に着けるためには、基礎的な日本語表現の指導以上に、一定の指導が必要であると考えられる。

だからといって、現在の小中高校の国語や現代文の授業は決して無駄ではない。むしろ、大学や社会で必要とされる業務文書が書けるようになるための基礎教養として、日本語の型を覚えるプロセスとして欠かせない。

しかし上記「2」であげた通り、現在それらは小中高校で十分に指導されていないようである。必然的に高等教育機関でも、基礎的な文章表現についての指導は必要になってくる。

4、文章表現系の科目に求められるもの

以上を踏まえると、対人援助職養成校における文章表現系の科目は、

- ①小中高校で十分な文章指導がなされておらず、能力的に不十分であること
- ②実際に大学や社会で必要とされる文章表現の手法に慣れていないこと
- ③専門職として必要とされる文章の作成方法を知らない

この3点を解決するための科目である必要がある。だとするならば、授業内容は、この3点に対応している可能性が高い。

そこで、実際に文章表現の授業の中で行われている文章指導の内容を把握することで、現在、養成校は対人援助職にどのような文章力が必要だと考えているのかが明確になるのではないかと考えた。

5、先行研究

保育士・幼稚園教諭養成校における文章表現系の科目に関する先行研究を見ると、学生に国語力や文章能力をつけさせるための講義内での様々な指導方法の工夫、実習日誌を基にした教育、リメディアル教育としての文章表現指導などについての研究が見られる^{7)～11)}など。様々な養成校で、目の前の学生の文章力に対して何とかしようとする努力をする教員の姿がそこにはある。

しかし、実際に文章表現系の科目では何が教えられているのか、といったことを様々な学校にわたり、広く調査した研究は、現在の所あまり見られない。

Ⅱ. 研究方法

1、調査概要

保育士と幼稚園教諭の養成をしている養成校で開講されている文章表現系の科目のシラバスを収集し、それぞれの講義の「到達目標」と、「講義13回分（全講義から1回目と15回目を抜いた講義）の内容」を分析し、分類する。これにより、保育士・幼稚園教諭二種養成校で実施されている文章表現に係る授業が、現在どのように展開されているのかを把握した。なお、シラバス上では、1回目の講義がオリエンテーション、15回目の講義がまとめとなっ

ていることが多い為、今回は1回目と15回目の講義については分析する上で読み取らないこととした。

1) 講義全体の志向性の把握

各養成校において、文章表現系科目が「専門科目」として設定されている科目（専門科目）か、あるいはそうではない科目（共通科目、教養科目、一般科目など。以下、教養科目と称する）かで分類する。これにより、その養成校での文章表現系科目の制度上の位置づけを把握する。

次に、各シラバスの「到達目標」に、保育士・幼稚園教諭を目指した内容が明記されている科目（専門職志向）か、あるいはそうでない科目（一般志向）かで分類する。これにより、実際にその担当教員は当該科目を通して何を学ばせようとしているのかを把握する。

2) 講義内容の分析

各講義の13回分の内容を、先述した文章表現系の科目に求められる、

- ①小中高校で十分な文章指導がなされておらず、能力的に不十分であることへの対応
 - ②実際に大学や社会で必要とされる文章表現の手法に慣れていないことへの対応
 - ③専門職として必要とされる文章の作成方法を知らないことへの対応
- 以上3つに対応する内容に分類した。すなわち、

- ①基礎的な文章表現の技術
 - ②大学や社会において必要とされる文章表現
 - ③専門職としての文章表現
- の3つの分野である。

各講義内容のコンセプトや意図は様々にあると考えられるが、今回はシラバスに書かれている授業内容について、表1のように分類した。

表 1) 講義内容の3つの分野

| | |
|----------------------------|--|
| 【分野 1】 基礎的な文章表現の技術 | 文法、漢字、助詞や接続詞の使い方、語彙力、ことわざや慣用句、自己分析など |
| 【分野 2】 大学や社会で必要とされる文章表現 | 敬語、ビジネス文書、電子メール、報告書、プレゼンテーション、論文、小論文、聞き方と話し方、電話対応、ブックリポート、アサーションなど |
| 【分野 3】 専門職としての文章表現 | 実習日誌、園だより、保護者への通知文、連絡帳、園内掲示物、朗読や読み聞かせの仕方など |

2、調査対象

調査対象のシラバスは、2016 年度に開校されており、インターネットにデータが公開してある国内の短期大学のものを収集した。

また、養成校には 4 年制や 3 年制があること、専門学校と短期大学と大学では、カリキュラムにも大きな違いがあることなどを踏まえ、今回は 2 年制で、保育士と幼稚園教諭 2 種資格を取得できる国内の短期大学についてのみ調査した。

2016 年 4 月の時点で講義が開かれているわが国の保育士・幼稚園教諭養成校である短期大学は 226 校である。この中から、筆者がインターネット上で科目ごとのシラバスを見つけられた短期大学は 177 校（全養成校中）である。

このうち、文章表現系の科目が開講されていない養成校もある。また、文章表現系の科目は、それぞれの養成校で、「基礎日本語」「リーディング&ライティング」「日本語表現」「国語」など、様々な科目名で開講されている。そこで今回は、「文章/日本語/国語」のうち、いずれか 1 つと、「表現」という言葉、計 2 つの言葉が科目名に冠されている科目のみをピックアップして調査した。

学校によっては、文章表現系の科目のみで 15 回講義、30 回講義、45 回講義と回数にばらつきがあるので、15 回講義と 30 回講義のみを調べ、30 回講義については、1 回目、15 回目、16 回目、30 回目を引いた 26 回分の講義内

容を分類した後、2分の1を乗算、13回分に換算した。また、当該科目を同時に複数の教員が担当し、その教員ごとにシラバスの到達目標や講義内容が異なる養成校があったが、今回はこれを除外した。

その結果、調査対象校は100校となった。

Ⅲ. 結果

1、調査結果の全体

調査対象100校の調査結果は、表2のようになった。

1) 科目の位置付けと到達目標

100校中、文章表現系の科目を「専門科目」としている養成校は35校(35%)、教養科目としている養成校は65校(65%)であった。また、各シラバスの「到達目標」に、保育士・幼稚園教諭を志向した内容が書かれていた養成校は29校(29%)、それ以外の養成校は71校(71%)であった。

養成校内での当該科目の位置付けと、当該科目の到達目標の2つについて相関をとったところ、表3のような結果となった。

2) 講義内容の分類

実際に講義内で、各講義内容の分野にどの程度時間が割かれているか(最多分野)を計算したところ、表4のような結果になった。

各シラバスの中身である講義内容について、13回のうち講義回数の平均は分野1が6.3回、分野2が6.1回、分野3が4.6回であった。

また、当該科目において、どの分野の講義が一番行われているかを調べた所、分野1に最も講義回数を割いている学校が44校(44.0%)、分野2が43校(43.0%)、分野3が9校(9.0%)、その他3校(3.0%)であった。その他3校のうち、2校は分野1と分野2に同じだけ講義回数を割いており、1校は分野2と分野3に同じだけ講義回数を割いていた。

また、13回の講義に1から3の分野の内容をそれぞれ一切含めていない養成校もあった(含まない分野)。分野1を含まない養成校は11校(11.0%)、

分野 2 を含めない養成校は 12 校 (12.0%)、分野 3 を含めない養成校は 57 校 (57.0%) であった。

3) 科目の位置付け・到達目標と講義内容の分析

科目の位置付けと、到達目標によって分けた科目ごとに、講義内容の傾向を分類した結果が、表 5 から表 8 である。

表 5 は科目位置付けが専門科目で、到達目標が専門職志向である養成校である。講義回数の平均は分野 1 が 6.2 回、分野 2 が 5 回、分野 3 が 6.5 回であった。最多分野は、分野 1 が 8 校 (47.0%)、分野 2 が 3 校 (17.6%)、分野 3 が 4 校 (23.5%) であった。含まない分野は分野 1 が 4 校 (23.5%)、分野 2 が 6 校 (35.3%)、分野 3 が 4 校 (23.5%) であった。

表 6 は科目位置付けが専門科目で、到達目標が一般志向である養成校である。講義回数の平均は分野 1 が 7.6 回、分野 2 が 5.9 回、分野 3 が 5.1 回であった。最多分野は、分野 1 が 10 校 (55.6%)、分野 2 が 6 校 (33.3%)、分野 3 が 2 校 (11.1%) であった。含まない分野は分野 1 が 3 校 (16.7%)、分野 2 が 4 校 (22.2%)、分野 3 が 11 校 (61.1%) であった。

表 7 は科目位置付けが教養科目で、到達目標が専門職志向である養成校である。講義回数の平均は分野 1 が 5 回、分野 2 が 3.8 回、分野 3 が 5.3 回であった。最多分野は、分野 1 が 5 校 (41.7%)、分野 2 が 3 校 (25.0%)、分野 3 が 4 校 (33.3%) であった。含まない分野は分野 1 が 1 校 (8.3%)、分野 2 が 1 校 (8.3%)、分野 3 も 1 校 (8.3%) であった。

表 8 は科目位置付けが教養科目で、到達目標が一般志向である養成校である。講義回数の平均は分野 1 が 6.3 回、分野 2 が 6.8 回、分野 3 が 1.7 回であった。最多分野は、分野 1 が 21 校 (39.6%)、分野 2 が 31 校 (58.5%)、分野 3 が 0 校 (0.0%) であった。含まない分野は分野 1 が 3 校 (5.7%)、分野 2 が 1 校 (1.2%)、分野 3 は 1 校 (77.4%) であった。

表2) 文章表現系科目 調査対象養成校一覧

| 養成校番号 | 科目位置づけ | 到達目標 | 講義内容 | | | 分類 |
|-------|--------|------|------|-----|-----|----|
| | | | 分野1 | 分野2 | 分野3 | |
| No1 | 専門 | 専門職 | 3.5 | 6 | 3.5 | ☆ |
| No2 | 教養 | 一般 | 1 | 8 | 4 | ◆ |
| No3 | 専門 | 一般 | 13 | | | ○ |
| No4 | 専門 | 一般 | 5 | 8 | | ○ |
| No5 | 教養 | 一般 | 2 | 11 | | ◆ |
| No6 | 専門 | 一般 | | 10 | 3 | ○ |
| No7 | 専門 | 一般 | 13 | | | ○ |
| No8 | 教養 | 専門職 | 1 | 5 | 7 | △ |
| No9 | 専門 | 一般 | | 13 | | ○ |
| No10 | 教養 | 一般 | 5 | 10 | | ◆ |
| No11 | 専門 | 一般 | 11 | 2 | | ○ |
| No12 | 教養 | 一般 | 4 | 9 | | ◆ |
| No13 | 教養 | 一般 | | 13 | | ◆ |
| No14 | 教養 | 一般 | | 13 | | ◆ |
| No15 | 教養 | 専門職 | 9 | 1 | 3 | △ |
| No16 | 教養 | 専門職 | 5 | 4 | 4 | △ |
| No17 | 教養 | 一般 | 8 | 5 | | ◆ |
| No18 | 教養 | 一般 | 4 | 8 | 1 | ◆ |
| No19 | 専門 | 一般 | 3 | 1 | 9 | ○ |
| No20 | 専門 | 専門職 | | 13 | | ☆ |
| No21 | 専門 | 一般 | 10 | 3 | | ○ |
| No22 | 専門 | 一般 | 1 | 12 | | ○ |
| No23 | 教養 | 一般 | 10 | 3 | | ◆ |
| No24 | 専門 | 一般 | 8 | 5 | | ○ |
| No25 | 専門 | 専門職 | 11 | 2 | | ☆ |
| No26 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |
| No27 | 教養 | 一般 | 7 | 6 | | ◆ |
| No28 | 専門 | 一般 | 3 | 9 | 1 | ○ |
| No29 | 教養 | 専門職 | 1 | 3 | 9 | △ |
| No30 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |
| No31 | 専門 | 専門職 | 3 | 10 | | ☆ |
| No32 | 教養 | 一般 | 13 | | | ◆ |
| No33 | 教養 | 一般 | 5 | 8 | | ◆ |
| No34 | 教養 | 一般 | 9 | 4 | | ◆ |
| No35 | 教養 | 専門職 | 1 | 8 | 4 | △ |
| No36 | 専門 | 専門職 | | 6.5 | 6.5 | ☆ |
| No37 | 専門 | 一般 | 3 | 5 | 5 | ○ |
| No38 | 専門 | 一般 | 13 | | | ○ |
| No39 | 教養 | 一般 | 9 | 4 | | ◆ |
| No40 | 教養 | 一般 | 5 | 8 | | ◆ |
| No41 | 教養 | 専門職 | 3 | 6 | 4 | △ |
| No42 | 教養 | 専門職 | 4.5 | 5 | 3.5 | △ |
| No43 | 教養 | 一般 | | 12 | 1 | ◆ |
| No44 | 専門 | 一般 | | 13 | | ○ |
| No45 | 教養 | 専門職 | 11.5 | 1.5 | | △ |
| No46 | 専門 | 一般 | 9 | 4 | | ○ |
| No47 | 教養 | 一般 | 6 | 6 | 1 | ◆ |
| No48 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |
| No49 | 教養 | 一般 | 9 | 3 | 1 | ◆ |
| No50 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |

| 養成校番号 | 科目位置づけ | 到達目標 | 講義内容 | | | 分類 |
|-------|--------|------|------|------|-----|----|
| | | | 分野1 | 分野2 | 分野3 | |
| No51 | 教養 | 一般 | 6 | 7 | | ◆ |
| No52 | 教養 | 一般 | 8 | 5 | | ◆ |
| No53 | 専門 | 専門職 | | | 13 | ☆ |
| No54 | 専門 | 専門職 | | | 13 | ☆ |
| No55 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |
| No56 | 教養 | 一般 | 11 | 2 | | ◆ |
| No57 | 専門 | 専門職 | 5 | 5 | 3 | ☆ |
| No58 | 教養 | 一般 | 9 | 4 | | ◆ |
| No59 | 教養 | 一般 | 1.5 | 11.5 | | ◆ |
| No60 | 教養 | 一般 | 9 | 4 | | ◆ |
| No61 | 専門 | 専門職 | 1 | | 12 | ☆ |
| No62 | 教養 | 専門職 | 9 | 3 | 1 | △ |
| No63 | 教養 | 一般 | 10.5 | 2.5 | | ◆ |
| No64 | 教養 | 一般 | 7 | 6 | | ◆ |
| No65 | 教養 | 一般 | 6 | 7 | | ◆ |
| No66 | 教養 | 一般 | 3.5 | 7 | 2.5 | ◆ |
| No67 | 教養 | 一般 | 7 | 6 | | ◆ |
| No68 | 教養 | 専門職 | 8 | 1 | 4 | △ |
| No69 | 教養 | 一般 | 4 | 9 | | ◆ |
| No70 | 教養 | 一般 | 5 | 8 | | ◆ |
| No71 | 専門 | 専門職 | 7 | 2 | 4 | ☆ |
| No72 | 専門 | 専門職 | 9 | 4 | | ☆ |
| No73 | 教養 | 一般 | 10 | 2 | 1 | ◆ |
| No74 | 専門 | 専門職 | 9 | 4 | | ☆ |
| No75 | 教養 | 一般 | 5 | 8 | | ◆ |
| No76 | 教養 | 一般 | 9 | 4 | | ◆ |
| No77 | 教養 | 一般 | 3 | 7.5 | 2.5 | ◆ |
| No78 | 教養 | 一般 | 8.5 | 4.5 | | ◆ |
| No79 | 専門 | 専門職 | 5 | 4 | 4 | ☆ |
| No80 | 教養 | 専門職 | | | 13 | △ |
| No81 | 専門 | 専門職 | 8 | 4.5 | 0.5 | ☆ |
| No82 | 教養 | 一般 | 5 | 7.5 | 0.5 | ◆ |
| No83 | 教養 | 一般 | 7 | 5 | 1 | ◆ |
| No84 | 専門 | 専門職 | 2 | 7 | 4 | ☆ |
| No85 | 専門 | 一般 | 6 | 5 | 2 | ○ |
| No86 | 教養 | 一般 | 12 | 1 | | ◆ |
| No87 | 教養 | 一般 | 6 | 7 | | ◆ |
| No88 | 教養 | 一般 | 4 | 9 | | ◆ |
| No89 | 教養 | 一般 | 4 | 5 | 4 | ◆ |
| No90 | 教養 | 専門職 | 2 | 5 | 6 | △ |
| No91 | 教養 | 一般 | 1 | 11 | 1 | ◆ |
| No92 | 教養 | 一般 | 5 | 8 | | ◆ |
| No93 | 専門 | 一般 | 10 | 3 | | ○ |
| No94 | 教養 | 一般 | 7 | 6 | | ◆ |
| No95 | 教養 | 一般 | 3 | 10 | | ◆ |
| No96 | 教養 | 一般 | 11.5 | 1.5 | | ◆ |
| No97 | 専門 | 専門職 | 9 | | 4 | ☆ |
| No98 | 専門 | 一般 | 7 | 3 | 3 | ○ |
| No99 | 教養 | 一般 | 12 | 1 | | ◆ |
| No100 | 専門 | 専門職 | 9 | | 4 | ☆ |

※当該養成校の講義内容で最も回数が割かれている分野のマスに着色。

※「分類」のマークは表3を参照

表 3) 科目の位置付けと到達目標との相関

| 科目位置付け | 到達目標 | | | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|----|
| | | 専門職 | 一般 | |
| | 専門科目 | 17 (☆) | 18 (○) | 35 |
| 教養科目 | 12 (△) | 53 (◆) | 65 | |
| 合計 | 29 | 71 | 100 | |

表 4) 当該科目の講義内容の分野

| | 講義内容 | | |
|---|-------|-------|-------|
| | 1 | 2 | 3 |
| 講義回数平均 | 6.3 | 6.1 | 4.6 |
| 学校別 講義回数が一番多い講義内容の分野 (最多分類) | 44 | 43 | 10 |
| | 44.0% | 43.0% | 10.0% |
| 学校別 講義回数に一度も含まれていない講義 内容の分野 (含まない分類) | 11 | 12 | 57 |
| | 11.0% | 12.0% | 57.0% |

表 5)

科目位置付け：専門科目
到達目標：専門職 (17 校)

| ☆ | 講義内容 | | |
|--------|-------|-------|-------|
| | 分野 1 | 分野 2 | 分野 3 |
| 講義回数平均 | 6.2 | 5 | 6.5 |
| 最多分野 | 8 | 3 | 4 |
| | 47.0% | 17.6% | 23.5% |
| 含まない分野 | 4 | 6 | 4 |
| | 23.5% | 35.3% | 23.5% |

表 6)

科目位置付け：専門科目
到達目標：一般 (18 校)

| ○ | 講義内容 | | |
|--------|-------|-------|-------|
| | 分野 1 | 分野 2 | 分野 3 |
| 講義回数平均 | 7.6 | 5.9 | 5.1 |
| 最多分野 | 10 | 6 | 2 |
| | 55.6% | 33.3% | 11.1% |
| 含まない分野 | 3 | 4 | 11 |
| | 16.7% | 22.2% | 61.1% |

最多分類について

1 校は分類 1 と分類 2 が同回数最多

1 校は分類 2 と分類 3 が同回数最多

表 7)

科目位置付け：教養科目
到達目標：専門職（12校）

| △ | 講義内容 | | |
|--------|-------|-------|-------|
| | 分野 1 | 分野 2 | 分野 3 |
| 講義回数平均 | 5 | 3.8 | 5.3 |
| 最多分野 | 5 | 3 | 4 |
| | 41.7% | 25.0% | 33.3% |
| 含まない分野 | 1 | 1 | 1 |
| | 8.3% | 8.3% | 8.3% |

表 8)

科目位置付け：教養科目
到達目標：一般（53校）

| ◆ | 講義内容 | | |
|--------|-------|-------|-------|
| | 分野 1 | 分野 2 | 分野 3 |
| 講義回数平均 | 6.3 | 6.8 | 1.7 |
| 最多分野 | 21 | 31 | 0 |
| | 39.6% | 58.5% | 0.0% |
| 含まない分野 | 3 | 1 | 41 |
| | 5.7% | 1.2% | 77.4% |

最多分類について

1校は分類1と分類2が同回数最多

IV. 考察

1. 文章表現系科目の養成課程内での位置付け

当該科目がカリキュラムのどの部分に位置づけられているかに注目する事で、その学科において当該科目をどのように意味づけているかがわかる。文章表現系の科目は専門科目ではなく、教養科目として位置付けられている養成校が65校（65.0%）を占めた。

また、専門科目と設定されていても、実際の内容は一般的な内容を教えるとした養成校が18校（18.0%）であり、多くの養成校が専門職としての養成というよりは、一般社会人として最低限の力をつけさせる意味で文章表現系科目をとらえているということがわかる。

文章表現系の科目を教養科目ではなく、専門科目として設定している養成校は、100校中35校であった。その多くが『教職課程認定基準等』における「教科に関する科目」の「国語」として設定している。ところがそれらの養成校の約半数である18校が、到達目標に一般的な内容を挙げ、保育士・幼稚園教諭を志向していないという結果が出た事に注目したい。

文部科学省の教育教職養成審議会は「教科に関する科目」について、「国語における国文学、数学における解析学など初等中等教育段階での教科内容

の背景となる専門的な知識及び技能の修得に係る科目群」としている¹²⁾。

確かに、現在の学生の文章表現能力を鑑み、短期大学が社会人になる直前の教育機関となる学生が多いことを考えると、履歴書の作成方法や、ビジネス文書の書き方などの文章表現は、是非習得してほしい内容ではある。しかし、これが「教科に関する科目」の国語の枠組みで設定されている場合、それら講義内容に含まれているのは適切だと言えるだろうか。

「教科に関する科目」である「国語」の指導に何が求められているのか、授業の位置づけや専門性を考えた上で、講義内容を熟考する必要がある。

2、到達目標のあり方が分野3に与える影響

表5から表8までを見ると、養成課程内での科目位置付けが専門科目であっても、必ずしも分野3に時間を割いているわけではない。また逆に、科目位置付けが教養科目であっても、分野3に時間を割いている養成校があるということがわかる。

どちらかと言えば、科目位置付けの違いよりも、到達目標の違いによって大きく差があった。専門科目であっても教養科目であっても、到達目標が専門職志向であるほうが、分類3に割く時間が多い養成校が多く（表9）、一般志向であるほうが、分野3を含まないことが多いという結果になった（表10）。

表9) 各分類で、分類3が最多である割合のポイント差

| 科目位置付け | 到達目標 | | ポイント差 |
|--------|-------|-------|-------|
| | 専門職 | 一般 | |
| | 専門科目 | 23.5% | 11.1% |
| 教養科目 | 33.3% | 0.0% | 33.3 |
| ポイント差 | 9.8 | 11 | |

表10) 各分類で、分野3が含まれない割合のポイント差

| 科目位置付け | 到達目標 | | ポイント差 |
|--------|------|-------|-------|
| | 専門職 | 一般 | |
| | 専門科目 | 23.5% | 61.1% |
| 教養科目 | 8.3% | 77.4% | 69.1 |
| ポイント差 | 15.2 | 16.3 | |

3、分野1の比重の重さ

講義回数を分野1に最も多く割く養成校は、44.0%であった(表4)。これは、文章表現の指導が小中高校で十分になされていない事を踏まえると納得できる数値である。

しかし本来、これらは高等教育機関に入学する前に習得すべき内容である。必要性があるから実施せざるを得ないのであるが、これによって、本来高等教育機関で行うべき教育のための時間が、十分に確保されなくなっているといえる。

保育士や幼稚園教諭をはじめとした対人援助職の養成校だけではなく、どのような社会人になるにせよ、基本的な文章表現能力が低下していると考えられる。つまり、どのような高等教育機関においても同じような状況が生じているのではないだろうか。

高等教育機関が対処療法的に文法の基礎から教えるような状況は変える必要がある。そのためには、小中高校において、「文章指導の必要性を強く感じるが、取り組めていない」という状況に切り込まなければならないと考える。

4、講義内容のバリエーションの豊富さ

当初、講義内容には文字表現の方法についての内容のみが扱われていると考えていたが、実際の講義内容を見ると、適切な声の出し方や、保護者や子ども相手に話す方法、電話対応の仕方、アサーションなど、音声表現やコミュニケーションについての内容を盛り込んでいる養成校があった。

また、いくつかの学校では講義内容に自己分析を盛り込んでいた事が印象的であった。文章を表現する前段階で、まず自らを見つめなおし、思いや考えを掘り起こした上で、それを具体的に表現する方法を考える、という講義展開になる。

文章表現系の科目は、幅広い内容を含めることが出来ることがわかった。

5、様々な位置付けで実施されている文章表現指導

複数の科がある短期大学では、文章表現系の科目を、別の科と共通の教養科目として設定している養成校があった。このような養成校では、到達目標が一般志向になるのではないかと思われたが、各専攻科によって担当教員を変え、教養科目であっても科の専門性に応じた講義を展開するなどの工夫が見られた。

また、シラバスを検索する際に、文章表現系の科目ではない科目で、文章表現を行っている講義がある事も見つけた。例えば、コミュニケーション能力をつけるための講義や、キャリア教育の講義として、あるいは実習指導の講義の一環などである。

V. まとめ

果たして、保育士・幼稚園教諭養成校における文章表現系の科目はどのような講義内容にするとよいのだろうか。

学生に分野1の力が弱いという現状に合わせると、3つの分野が均等に含まれている講義内容が最も現実的である。しかし、本来大学で分野1を教えるという構造自体がおかしいと考え、分野2と分野3にウェイトが置かれるべきである。現実と理想のバランスをどうとるのかという点は大変悩ましい。

しかし、今回研究することで、ヒントが得られた。それは、科目の位置付けがどうなっていたとしても、当該科目を担当する教員の志向性によって、講義内容は大きく変化するということである。また、キャリア教育の講義や実習指導の講義など様々な科目でも文章表現的な教育を展開することが可能だということである。それはつまり、科目自体の自由度が高く、他科目との連携もしやすいということを意味する。

さらに言えば、講義内容を考える際には、その養成校のカリキュラムの中で、文章表現系の科目がどんな役割を果たすべきなのか、他の科目との関係

性の中で考えていくことが肝要だということである。

筆者は現在、文章表現法の科目を担当している。実習指導の授業も担当している為か、文章表現法の授業は保育実習や教育実習と関係する内容が多く、全体的に専門職志向だという特徴がある。今回の研究により、自分でも気付かぬうちに実習授業との連携をしていたことに気付かされた。それと同時に、専門職志向ではあるが自分の担当している科目との連携に偏りすぎていることで、カリキュラム全体の中での文章表現系の科目の役割を見失っている自分を戒める機会にもなった。講義内容についてもバリエーションが豊富であり、様々な工夫の余地がある、大変魅力的な科目であることに気づかされた。

文章表現系の科目についての論文や議論は、往々にして学生のコミュニケーション力の低下や、基礎学力のなさなどの文脈で語られることが多い。しかし、他科目との連携がしやすく、アレンジの方法によっては発展的な講義が行える科目なのだということがわかった。

養成校のカリキュラム全体の仲での立ち位置を十分に確認し、他科目との関係性に配慮した上で、積極的に講義の展開を考え、学生にとってより良い教育となるように研鑽を積んでいきたいと思う。

○引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」平成25年8月8日改正版 厚生労働省
- 2) 文部科学省教員養成部会「教職課程認定基準等」平成21年年度改訂版 文部科学省
- 3) 佐藤達全「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応：日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして」『育英短期大学研究紀要』(31)、57ページー71ページ 2014年3月 育英短期大学
- 4) 田中宏幸「大学教養教育における文章表現指導の実際—2003年度1期「文学VI」の場合」大阪国語教育研究会編『中西一弘先生古稀記念論文集』92ページー101ページ 2004年2月
- 5) 「文章指導は重要なのにできていない 6割超の国語科教員ら 苦手な生徒多いが時間ない」教育新聞 2016年9月22日
- 6) 高松正毅「「文章表現技術」の理論確立に向けて」『高崎経済大学論集』第45巻 第4号 2003年

- 7) 佐藤達全「保育者を目指す学生の文章力を高めるための取り組みについて ―保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習日誌を比較して考える―」『育英短期大学研究紀要』32巻、53ページ―72ページ 2015年3月
- 8) 佐藤達全「文章表現から見た保育科学生の問題点：表現の特徴と思考力の関係」『育英短期大学研究紀要』13ページ―24ページ 23巻 2006年2月
- 9) 佐藤達全「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応：日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして」『育英短期大学研究紀要』57ページ―71ページ 31巻 2014年3月
- 10) 今井慶宗「短期大学の教育課程における文章表現科目の研究：保育士養成課程の福祉教育を通して」『地域福祉サイエンス』3巻 153ページ―162ページ 2016年3月 地域福祉総合研究センター
- 11) 松崎史周「保育者養成短期大学における国語力育成のあり方」『清泉女学院短期大学研究紀要』31巻 1ページ―11ページ 2012年3月
- 12) 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第1次答申）」1997年7月 文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm 2017年2月10日確認